



老川美治

新平家物語

第四卷

六波羅行幸の巻

昭和二十六年十一月二十五日初版發行
昭和二十七年六月三十日四版發行
定價二八〇圓

新・平家物語 第四卷 六波羅行幸の巻

著者 吉川英治

發行者 杉山胤太郎

印刷所 東京都新宿區市ヶ谷加賀町
大日本印刷株式會社

發行所 東京都丸ノ内
大阪市中之島
小倉市砂津
朝日新聞社

六波羅行幸の卷
目次

商人胸曆

不知火

暗黒宮

信西・穴這入り

惡源太義平

非時香果

清盛歸る

稚氣の冠

三

一二

二二

三三

四六

五五

六九

七九

落伍	餓鬼國管絃樂	すゝはらひ	狼	雪のあと	逆さ兜の事	平治見物記	櫻と橘	左折れ右折れ	源氏名簿	過去・現在・未來	女房衣
二〇五	一八九	一八一	一七二	一六一	一四九	一四〇	一二七	一一四	一〇二	九六	八九

天意不可思議

二一六

紅梅は心まで紅い

二三二

慈悲喧嘩

二四六

膽大小心

二五七

常磐艸子

二六八

女ぐるま

二八二

續・常磐艸子

二九三

木乃葉笛

三〇七

六波羅行幸の卷

商人胸曆

霜の朝である。近くの五條坊門の市場は、いつものやうな雜鬧に明けてゐた。そこらの小さい軒並みの棚とは比較にならない大きな店家を持つ朱鼻の伴卜の住居の奥まで、その喧騒は往來をこえて聞えて来る。

鼻は、人いちばい、早起きだつた。——もう得意先か、どこかを一周りして歸つて來た。たゞさへ赤い鼻を赤くさせ、馬のやうな白い大息を凍らせながら、すぐ焚火のそばへ寄るでもなく、雇人長屋を覗いてゐた。

『おい／＼、わい等はまだ支度にかゝつとるのか。何ぼ、旅賣に出るからというて、念入り過ぎるぞい。早う出んか、早う』

そこから少し離れた所に、またべつに販女たちばかりの住む長屋がある。そこでも、彼は喚いてゐた。

『今月は師走だぞよ。をとゝひから十二月に入つたのを知らぬのか。わい達も、年暮くいッぱいは精出して稼いでおかねば、正月をどうするのや。人なみに、曠れ着の一枚も着て、白粉でも塗りたくらにや成るまいがな』

それからである。鼻は、やつと、庭づたひに住居の縁へやつて來た。そして、

『梅野、梅野。飯をくれい、朝飯ぢや』

と、ワラ杓くさを脱いで、家の内へ上つた。

彼の妻は、女童わらわと一しよに、粥鍋かゆなべやら干魚や漬物などを取揃へて、人なみ以上勤勉な良人に、人なみ以上氣をつかつた。

『お寒かつたでございませう。今朝は、氷柱こりいが下がつてをりますもの』

『何のい』と、鼻はもう粥の盥わんをフウ／＼吹きながら、『十二月といへば、世間は暗いうちから車も牛も稼いでゐる。わが家の販夫ひきざたちは、飢もじさ知らずで、何うもならん。——あ、鹿七は店にゐるか。ちよつと、こゝへ呼んで來い』

女童わらわが呼びに行つた。鹿七とは店の手代てだいの一人である。鼻は二、三日前の朝、夕顔三位がこゝを訪ねて來て、彼の密談を受けてから、その日、鹿七にも自分の肚を割つておいた。そして、人出入りの多い店の締りなども、何かと呑みこませてあるのだつた。

『鹿七。あれから何も怪しさうな者は来ないかね。大丈夫だらうな』

『ご安心下さいまし、表の方の事は一切。……それに、年暮内は、店先の小販ぎは仕らず候と、掛札をしておきましたから』

『放免（密偵）や六波羅衆などが、どう姿を變へて来まいものでもないからな』

『いえ。それよりは、うちの販夫たちの目や口を、よほど、お氣をつけになりますと』

『だからさ、今日かぎり、長屋のあれ共はみな旅販ぎへ出してしまふのだ。それを今朝も手間どつてゐるから、今、ひと喧鳴りやつて来た所だ。もう一度、おまへが行つて、側から喧しく追ひたてろ』

『承知しました。申しつけませう』

『ア、お待ち。まだ用があつたぞ。きのふ魚市の者へ誂へた大鯛は、まちがひなく届くだらうな。——けふは三日、あすは四日。あすとなつては、間に合はんでな』

『魚の夜船は、夜明けに淀へついても、こゝまで着くには、どうしても陽が高くなります』

『荷がついたら、おまへも梅野の供をして、ちよつと、行つて貰はにやならんぜ』

『へい。それも心得てをります』

土倉の前では、行商の旅へ立つ販夫の男女が群れて、荷を負つたり、荷駄に積んだり、わいわ

い騒ぎ合つてゐた。毎年、暮になると、地方向きの雜貨を擔つて、大和、和泉、近江路、遠くは美濃あたりまで賣子を出すのは京商人の例であるが、なぜか朱鼻あけなの店では、それが例年より早く行はれた。

手代の鹿七は、やがて、それらの男女を旅へ立たせて、やれ／＼といふ顔つきだつた。そして燃え残りの焚火のそばへ寄つてゐると、そこへ二輛の手車を押して市場の男が入つて來た。男共は、雑巾みたいな直垂ひたれの袂を背なかで結び、烏帽子えぼしも袴はかまも鱗屑うろこくずに光らせてゐた。

『だんな。こんな大きな明石鯛を、しかも五十枚も、一度に揃へたことはないつて、漁師も云つてをりましたぜ。どうです、この見事なこと』

男たちは自慢しながら、二尾づつ笹詰めにした尺餘の大鯛を二十五籠で五十尾ごじ、そこへ下ろした。

鼻も出て來て「ご苦勞、ご苦勞」と、ねぎらつてゐたが、その夥しさに、眼惑めまどひした。

『おい／＼、鱸すずきはどうした。かんじんな鱸は』

『え、鱸ですか。だんな、鱸は一ぴきでよかつたんでせう』

『さうよ、鱸が眼目なんだ。五十尾の鯛も、鱸がなくては、花見に酒が無いやうな物になつちまふ』

『ありますく。すばらしい大鱈だ。だんな、べつな籠で、こゝにあるのが鱈ですよ』

男たちが戻つて行くと、鼻は、かねて鹿七に命じておいた進物の支度を急がせた。夥しい魚はすべて包装を改められ、笹の葉や南天の實で彩られ、一荷の吊臺に納められた。

手代の鹿七を供につれて、鼻の妻は、盛装をこらした姿で、五條大橋を東へ渡つて行つた。

うしろには又、二吊の擔架を小者に昇がせて従へてゐた。一臺には鮮魚の進物、もう一臺には巻絹だの宋の酒瓶だのが、美しく盛られてゐた。もちろん油單が掛けてある。外からは婚禮の荷やら何やら分らない。

橋を渡ると、すぐその邊から、平家衆の住む塙や築土の六波羅聚落である。明日、十二月四日には、清盛、重盛父子が、熊野へ立つといふ日であつた。そのせゐか、馬、車、諸家の郎黨たちの往來が常より繁しい。

鼻の妻は、御臺盤所屋敷のはうへ曲がつた。厨門の西に、もう一つ女房門がある。彼女は、門侍とも日頃から懇意らしく、笑ひ交はしただけで通された。奥まつた局の前栽の木蔭へ、その姿は隠れて行く。

やがて。——女の長ばなしでもして來た爲か、待たされたのか、ずるぶん長い時間の後、彼女はそく戻つて來た。歸りがけにも、門侍たちへ、あいそを撒き、何か鼻ぐすりを、こぼして歸つた。

『梅野。どうだつた、御首尾は』

鼻は、待ちかねて居た。妻の姿を見るとすぐ訊ねた。

『それはもうあなた、たいへんな、およろこびやうで御座いました。御臺盤所様にも』

『さうか、奥がたの時子様にも、お目にかゝれたのか』

『そればかりでなく、品々を御前に御披露下すつて、清盛様にも、重々のおよろこびぞやと、おことばを賜はりました』

『ほかの品々はともかく、鱸の事には、何とも仰せはなかつたか』

『——わが家の吉魚は鱸といふことを、朱鼻は、いつ、たれに聞いてぞや。しかも明日は殿の熊野立ちといふ今日に、鱸とは、ようぞ氣づいたものよ。心きぎたる第一の贈り物……と、それは、お賞めにあづかつて、私までが、何やらうれしくなつてしまひました』

『その圖に乗つて、うかとした事を、よもや口を辻らせはしまいな』

『いえ。あの事は……』

と、梅野は急に、怖ろしい良人の懸引と、使の意味を思ひ出して、口をつぐんだ。

六波羅の大貳清盛は、翌四日の朝、この河向ふから、熊野路へ立つて行つたのである。——そしてその夜は江口、次の日は船路、やがて和歌ノ浦、紀伊の驛路と、日をかさねて、切目の宿で、京師の變を、聞いたのだつた。

かうして、變亂の支度は、すでに、彼が離京する前から、用意されてゐたものだつた。さうも云へるし、清盛の出立が、その勃發を、招いたとも、云へなくはない。

鼻は、利殖にも敏いが、時局の嗅覺も強い。恩人の三位經宗から、陰謀の相談にあづかると、それにも乗つた。しかし雑色上りの下郎から、わづかな間に、大商人の仲間へ成り上つた程な男である。徹底した商人根性の持ち主だ。ぜひなく表面は、恩人の義に與しても、また、經宗のいふ大利をそれへ賭けたと見せても、青公卿の謀反に、全財産と生命を賭けるほど、彼の頭は幼稚でもないし純情でもない。どうせ、保元の亂の再現はまぬかれ難いものと見て、賭けるには賭けても、彼は、兩方へ賭けておいた。

（いちかばちかの博奕はやる者の心次第さ。公卿同士、武門同士で、やるがいい。わしは商人だ。算盤は外せない）

彼は、妻にも鹿七にも云ひきかせてある。一面、經宗の陰謀には同腹しても、一面、六波羅殿

の旅立ちには、心を用ひた祝ひ物を、裏から贈つておく事も、怠らずにゐた彼だつた。

かくて、清盛熊野へ立つ、と聞えた夜には、洛中の陰謀組はもう活潑なうごきにかゝつてゐた。といつても、飽くまで秘密裡だつたのはいふ迄もない。五條坊門の鼻の住居は、さしづめ舉兵準備の本據になつた。

平安の都の内でも、こゝら邊りは、市井しせい的雜鬧の中心地といつていい。都の繁華の推移は近年、妙に、東南へ東南へと、伸張してゐた。これは六波羅が開け、殊に保元以後は、平家衆一般の景氣がよい爲であると、市人いちびとたちは云つてゐる。

三位經宗は、さすが智者らしい。さうした巷の中の、しかも六波羅とは川一筋の對岸に、會合場所も選んだのである。そんな所で、過激な若公卿ばらと、源氏の將とが額をあつめて、政權顛覆の秘謀をすゝめて居ようとは、疑つてもみられない事にちがひない。

折ふし巷は、日毎に歳末の騒音を増してゐた。鼻は鹿七と共に、よく店にも姿を見せ、市場にも相變らずな顔を出してゐた。その間、彼の住居の奥には、ふしぎな人々が寄り集まつてゐたのである。

七日の夕方は、冷たい小雨であつた。

裏木戸の邊には、炭俵の山や、あき樽など積んであつた。これも、人出入りを偽裝する爲のも

のらしく、蓑笠や、法師被きや、旅人姿など、來る者來る者の變装も種々だつた。或る者は、堤の枯れ柳に、馬をつなぎ捨て、或る人は、牛車を脱けて、從者に雨傘を翳させ、小走りに、隠れこんだりした。——この夜を以て、舉兵の日時も、軍議も了るさいこの會合といはれてゐたので、公卿側の主なる顔も源氏の領袖も、ほとんど集まつた。

右衛門督權中納言信賴も來てゐる。檢非違使別當惟方もゐる。三位經宗はもちろん、越後中將成親や源中納言師仲など、日頃から深草の亭を中心としてゐた若公卿は残らず居た。

源氏側では、左馬頭義朝が、腹心の鎌田次郎正清と多田賴範を伴つて來てゐた。——それと、この晩は、兵庫頭源賴政が、初めて顔を見せてゐた。かねて義朝から誘ひをかけてゐた人だが、これまでの會合には出て來なかつた賴政であつた。その賴政が新たに加はつたことは、信賴や惟方などをして一そう意を強うさせた。